

○ Ⅲ期 ～自然とのかかわり～

先生、ほら！
ハッサクがなってるよ。



飼育舎

ドングリみ～つけた！



ぼくが捕まえたのを
あげるよ。(うみ組か
らほし組へ)



落ち葉で何して遊ぼう
かな？



お米ができてきたね。



きれいに飾ってみました。
(ムラサキシキブと草花を
使って)



木陰は涼しくて
気持ちいいな～。





カキだ～。
おいしそう！



天気がいい中で走ると
気持ちいいな～。



おいしい料理をどうぞ。
(身の回りの自然物を使って)



早く焼けないかな。
(焼き芋)



ヨウシュヤマゴボウの
こと、うみ組さんに教
えてもらったよ。



チクチクのクリの中ってど
うなってるのかな？





秋のレストランです。
ドングリスープ、ドン
グリケーキがあります
よ。



うみ組



クヌギの実に顔を描い
たよ。

くっつきむしだ～！
(オナモミを見付けて)

ほし組

はな組

やった！捕まえたぞ。



場面 セミの抜け殻

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

2学期が始まり、子どもたちは少しずつ園生活のリズムを取り戻す中で、自分の好きな遊びを楽しんでいる。その中で、トンボやバッタを捕まえたり、観察したりする様子が見られ、時には捕まえたトンボやバッタを逃がす姿も見られるようになってきた。また、この時期ならではの残暑の厳しさを感じている子どもたちである。

子どもの姿

保育者の援助

〔9月2日〕

- セミの抜け殻を探す。

A「セミの抜け殻どこにあるのかな」

B「下に落ちているんじゃない」

C「木についているはずだよ」

- 抜け殻を発見し、観察する。

B「先生、あったよ。(セミの抜け殻の目の部分を見て) このセミは目を置いていっているよ。目が見えないんじゃない」

保「本当？ちょっと触ってみたら」

B「てかてかだよ。あ、お腹はぼこぼこだ」

A「うわ、すごい、ぼこぼこ」

C「本当だ！変なの」

保「本当だね。お腹はぼこぼこで、目はてかてかなんだ」

A「他のところは？」

〔9月4日〕

- 年長児がセミの抜け殻を集めたかごを持ってくる。

保「うみ組さんがセミの抜け殻を持ってきてくれたよ。一昨日のセミの抜け殻と比べて目はどうなっているかな」

B「わあ。先生、全部（目がついている）、これはついているんだね」



- 子どもたちが自分たちで見つけようとしている姿や、木の高い位置のものなど、ついている場所によっては援助ができるようにして見守った。

- 子どもたちに、諸感覚を使って観察ほしいと思い、言葉掛けを行った。

「本当？ちょっと触ってみたら」



「中を見てみたら」

「他のセミとも比べてみようよ」

- 子どもたち自身の気付きを広げることができるよう子どもたちの言葉を繰り返したり、気付いた情報をお互いに共有している姿を見守ったりした。

- 年長児が持ってきてくれたかごを部屋に置き、子どもたちがいつでも観察できるようにした。

- B 児の新たな発見につながるような言葉掛けを行った。

「一昨日のセミと比べて目はどうなっているかな」

考察

本事例は、セミの抜け殻を通じて、新しい発見をしたり、情報をお互いに交換、共有したりしている場面である。この場面での子どもたちは、年少の頃より気付きが大幅多くなり、視野が広がったように感じた。その情報を友だちと交換し合いながら、セミの抜け殻とのかかわりを楽しみ、興味を深めていったのではない。

また本事例では、諸感覚を駆使しながら自然と触れ合ってほしいという思いから、視覚的に感じるだけでなく、「手で触ってみたら」と触覚を使えるような言葉掛けを行った。しかし、今回は子どもの思いを大切に受け止め、子どもの新たな発見に導けるような言葉掛けや好奇心をくすぐることができるような言葉掛けをしてもよかったのではないかと感じた（例：灰色の四角の言葉掛け）。本事例では、2日後に年長児が偶然セミの抜け殻を持ってきてくれたことから、B 児と他のセミの抜け殻とを比較して観察し、B 児は新しい発見にめぐり合えたのではないと思う。今後、子どもの思いを受け止め、心を揺り動かされるような様々な言葉掛けを探り、工夫していきたい。

本事例から見られた年中児の自分らしさの広がり

自然と触れ合い、興味をもつ姿



興味を深め、新たな発見にめぐり合う姿

対象児 年中児

記録日 平成21年10月 6日 (火)

場面 Aくんのクリから・・・

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

2学期に入り、友だちとのかかわりが深まってきたと同時に、自分の周りの人やものへの関心も高くなってきている。9月末から友だちや保育者と一緒にクヌギの実を拾ったり、「ドングリの帽子だあ」と言いながら殻を拾ったりする姿が見られるようになってきている。また、オナモミを見つけて「くつつき虫」と言いながら遊ぶ姿が見られ、「どこにあるの?」と尋ねる友だちに対して「こっちだよ」と教えてあげる姿も見られるようになってきている。

子どもの姿

- A児がクリのいがを持って登園してきた。
A「先生これ見て、何だと思う?」
保「うわあ、チクチクしたのがいっぱいいついてるね」
A「これね、クリだよ。でもクリは無いの。先生、これ僕が持ってきたって後でみんなにお話してよ」
- 弁当の準備でみんながそろったときに、クリを紹介した。
保「みんな、これ、何か分かるかな?」
A「クリだよ、ぼくが今日持ってきたんだよ」
保「幼稚園の庭にもクリの木があるのだけれど、みんなはどこにあるか知っているかな?」
B「知らない」C「見付けたい」D「どこ?」など
保「ヒントは田んぼの近くにある三角のお家の近くだよ。ご飯を食べてから探しに行ってみよう」
- 昼食後、早々にクリ拾いに出掛けたB児が保育室に戻ってくる。
B「先生、ぼくもう見付けたよ!」
保「大きいのが見付けたね」
保育者・C児・D児・E児も探しに出掛ける。
G「僕も早く見付けたい、どこにあるの?」
H「見付けた!・・・痛い!先生とってよ」
G「どこにあるの?僕にも教えてよ」
G「先生、持てた!そっと持ったらできた!」
保「そっと持ったら痛くないって分かったんだね」
E「先生、上を見て!クリがあるよ(なってるよ)」
保「よく気が付いたね。ということは、この木がクリの木なんだね」
G「じゃあ、この木の下を探そう」

保育者の援助

- 興奮した様子で「先生これ見て、何だと思う?」と話すA児の姿に、心を動かされて感動したことを保育者に早く伝えたいという思いがあることを察し、共感受け止められるようにした。
- 「～みんなにお話してよ」というA児の言葉には、心を動かす体験を通して感動したことをみんなと共有したいという気持ちがあると捉えた。周りの子どもたちに伝えることで、A児の気持ちに答えるとともに、幼稚園にもクリの木があることを紹介し、これを機に子どもたちが秋の季節を感じられる一つのきっかけになるようにした。

- 保育者のヒントを基に自分たちでクリの実が落ちている場所を探し当てた子どもたちであった。すぐに見付ける子、なかなか見付けられない子がいた。保育者も近くで一緒に探しながら、一人一人の動きや、子ども同士で伝え合い、やりとりする姿を大切にしながら見守るようにした。

「そっと持ったら痛くないって分かったんだね」

「よく気が付いたね。ということは、この木がクリの木なんだね」



割って中を見てみようよ!

考察

今回の事例は、友だちに自分が経験したことや気付いたことを伝えながら、クリの実を拾ったり栗のいがのチクチク痛い感触を味わったりした事例である。

今回の事例のきっかけになっているのは登園時のA児である。A児は自分がクリのいがを拾ってうれしかった気持ちを保育者に伝えるだけでは満足できず、クラスの友だちにも伝えたいという強い気持ちが見られたので、保育者はA児の気持ちを汲み取りながら、クラス全体に紹介する機会をもつことにした。そのことで、A児の気持ちが満たされたとともに、これまでクリの存在に気が付いていない周りの子どもたちに関心をもたせるよい機会になったと思う。また、その後のクリ拾いの中でも、自分が経験したことや気付いたことを友だちや保育者に伝えたり教わったりする姿が見られ、人に伝えることで自分の満足感も高まったのではないかと思う。


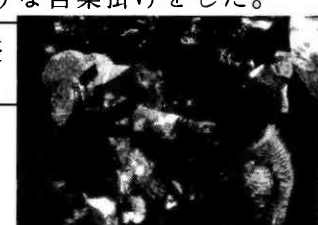
今後も、自然体験の中だけに限らず、子どもたちが自分で経験して感じた喜びや気付きを周りの友だちや保育者へ伝えようとする姿を大切にしながら、子どもたちの好奇心や気付きを大切にしていきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

木の実などの様々な自然物に興味をもつ姿



友だちの話を聞いて知ったことを自分もやってみて、経験したことを伝え、満足感を味わう姿

場面	ドングリ探し	かかわりの対象	人	もの	自然
<p>これまでの姿 子どもたちは、幼稚園での過ごし方にも慣れ、保育者との信頼関係のもと「仲間に入れて」「〇ちゃん一緒に遊ぼう」などの言葉を使って、友だちとかかわる面白さを味わうようになってきた。また、春や夏の頃に捕まえたダンゴムシを探したり、衣服の衣替えをしたり、風の心地よさを味わったりする中で、季節が移っていくことも感じている。 この時期の園庭は、栗や柿が実り、ギンモクセイが咲き始めている。クヌギやマテバシイも落ち始め、子どもたちは保育者や友だちと一緒にドングリ拾いを楽しんでいる。</p>					
子どもの姿		保育者の援助			
<p>〇 保育者や友だちとドングリ集めに行く。 A「先生、あった！」 B「ほらっ、ドングリの帽子もあった」 C「今日もおみやげいっぱいだあ！」 保「今日もクヌギがたくさん落ちてるね。先生も見付けたよ！あっ、あそこにもあった！」 C「先生、クヌギ、こっちにもあるよ！」 保「Cくんが、向こうにもクヌギがあったよって教えてくれたよ！みんな行ってみようよ！」</p> <p>〇 年長児からクヌギをもらう。 E「ねえ、何をしているの？」 保「今ね、みんなでクヌギを探しているんだ」 F「ほらっ、ほくこんなに見付けたよ！」 A「いいなあ」 F「あげるよ。ほく、たくさん持ってるから」 保「よかったね。Fお兄ちゃん優しいね。Fくん、ありがとう」/A「ありがとう」/BDD「ありがとう」 C「先生、マテバシイのところに行ってみよう！」 保「いいよ！行ってみようか」</p> <p>〇 マテバシイを探す。 A「あった～！」/C「ほくもほしいな…。あった！」 保「あそこを見て！マテバシイの実が茶色くなってるよ！もうすぐ落ちてくるかもね」 C「うん！前は緑だったよね」 B「あのドングリほしい。まだ1個しかない…」 A「Bちゃん、あげる。2つあるから」 C「ありがとう」/A「どういたしまして」</p> <p>〇 年長児がクヌギをたくさん持って駆けてくる。 F「はな組さ～ん！クヌギあったよ。あげる！」 保「ええ～！Fくんいいの？ありがとう」 E「ほくもたくさんあるから、あげるよ」 保「なんてうみ組さんって優しいんでしょう。うれしい気持ちになるね」 ABCD「ありがとう」/EF「どういたしまして」</p> <p>〇 食事の中でドングリ集めが話題となる。 C「今日さ、クヌギがたくさんあったね」 保「たくさん落ちてたね。袋がいっぱいになったね」 C「でさ、うみ組さんがくれたよね」 A「そうだよ。うみ組さんって優しいんだよ」</p>		<p>〇 「ドングリを集めたい」という思いを受け止め、見付けた喜びを共有したり、友だちの気付きが広がるような言葉掛けの工夫をした。</p> <p>「Cくんが向こうにもクヌギがあったよって教えてくれたよ」 </p> <p>〇 年長児の優しさや、必要な言葉に気付くような言葉掛けをした。</p> <p>「お兄ちゃん優しいね」 </p> <p>〇 視線を上に向け、木々の変化に気付くような言葉掛けをしたり、友だちに分ける姿を見守ったりした。</p> <p>「あそこを見て！マテバシイの実が茶色くなってるよ！」</p> <p>〇 ドングリをもらった喜びに共感したり、保育者の気持ちを伝え、「人」の優しさに気付くようにしたりした。</p> <p>「うれしい気持ちになるね」</p> <p>〇 子どもたちと一緒にドングリ集めについての会話をしながら食事を楽しむようにした。</p>			
<p>考察 本事例は、保育者や友だちと遊びを楽しむ中で、木々の色の変化に気付いたり、年長児の優しさに触れたりした事例である。 保育者は、一人一人の「ドングリがほしい」という思いを満たせるよう、丁寧にいかわりながら、子どもたちの気付きに共感したり、その気付きや年長児の行動が子どもたちへの刺激となるような言葉掛けをしたりした。子どもたちはクヌギやマテバシイを見付けたり、保育者や年長児からもらったりして、自分で見付けた喜びや「人」の優しさを味わえたのではないだろうか。「前は緑だった」マテバシイが茶色くなってきたという気付きも大事にしたい。 今後、四季折々の草花や木の実、果実等を見付け、摘んだり、身に付けたり、ままごとなどに取り入れたりして繰り返し遊ぶ姿を期待したい。</p>					
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 10px;">ドングリを見付けて遊ぶ姿</div> <div style="font-size: 40px; margin: 0 20px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 10px;">友だちとドングリを分けたり、年長児の優しさに気付いたりする姿</div> </div>					

気付く

自然への親しみ

想像力

満足感

対象児 年少児

記録日 平成21年10月16日(金)

場面 秋の庭歩き

かかわりの対象 (人) もの (自然)

これまでの姿

日中は暑いですが、朝夕の気温は涼しくなり秋を感じるようになってきた。クヌギの木の実がたくさん落ちるので、年少組の子どもたちは毎日拾いにいき、ままごとに使ったり、家に持ち帰ったりしている。クヌギの実はコロンとした姿がかわいく、手で握りやすい大きさに子どもたちにとってうれしい秋の収穫物である。子どもたちは保育者の助けを借りながら、クヌギのほかにアラカシ・コナラなどのドングリ類や草の実(オナモミ・イノコズチ・オヒシバ等服に付くもの)などに気が付き自分で探そうとしたり、集めようとしていたりしている。

子どもの姿

- 園庭を歩く。
 - A「ほら、見て」
 - 保「なにが入ってるの」
 - A「ドングリ」
 - 保「ドングリさんのぼうしも入ってるんだね」
 - B「私もいっぱい見付けた」
 - 保「Bちゃんもクヌギをたくさん見付けたね」
 - B「もうないよ」
 - 保「みんなが見付けたからね。また明日落ちてくるよ」
 - A「そうだね」
 - B「ほら、わたしオナモミも持ってるんだよ。ひつつくんだよ」
- B児が自分のセーターにひっつけて見せる。
- ほかのものを探す。

保育者の援助

- 10月になると園庭のクヌギの実がたくさん落ちるようになり、年長児たちが拾っては見せてくれたり、譲ってくれたりしていたので年少児も徐々にクヌギへの興味が高まってきていた。まだ、クヌギの数は少ないが子どもたちが自分の目や手で見付けられるように、行動を共にした。
- クヌギも数に限りがあるので、自分が思ったほど手に入らなかったり、たくさん手に入れた子がうらやましかったりすることもある。そこで明日への期待を抱けるような言葉掛けを心掛けた。

「みんなが見付けたからね。また明日落ちてくるよ」
- クヌギやオナモミ以外の木の実や草の実がないか、A児の興味・関心をひくものがないかと思いながら行動を共にした。

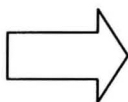
考察

運動会の頃より秋の気配がはっきりとしてきて、色とりどりの落ち葉や木の実、草の実が子どもたちに収穫する面白さや友だちと競い合って探す楽しさを感じさせてくれていた。服につく草の実の面白さや不思議さなども、「なぜだろう」「どうしてこうなるのか」といった探究心につながる思いを育ててくれると考える。

ドングリや服につく草の実の種類や名前も把握すると同時に、子どもたちの身近にそれらの木や草が存在するように、種をまいたり育てたりしていくように努めたい。また、自然物だけでなく、秋の気配を感じられる空の様々な色合いや雲の濃さ、形、空気の温度や湿度、重く感じたり軽く感じたりするような空気の流れ、かすかな花や樹木のにおいなど、**気象や目に見えないものも大切にしたい。**

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

秋の自然を楽しむ姿



秋の自然や植物の不思議さを知る姿

場面 秋のレストラン

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

9月末頃になると、園庭には茶色に色付いた葉やクヌギの実、ツバキの実などが落ち始める。年長組の子どもたちは、これまでの経験から、どこにどのような実が落ちているのかを知っており、落ちたものを集めて自分たちの遊びに取り入れる姿が見られる。年少、年中組の頃は見つけること、集めることが楽しいと感じる姿が多かった子どもたちも、年長組になると、集めることを一通り楽しんだ後、集めたものを使ってどのように友だちとの遊びを楽しもうか話し合う姿も見られるようになる。本事例では、子どもたちが話し合いながら、身近な自然物を使って数日間、ごっこ遊びにたっぷり浸る姿を紹介する。

子どもの姿

- 集めたクヌギの実、落ち葉を使って遊ぶ。
A「先生、食べに来てください。レストランです」
保「どんなごちそうがあるんですか？」
B「（砂と水と混ぜながら）クリスープですよ」
C「わたしのは、ドングリケーキですよ」
保「秋のごちそうがいっぱいおいしそうですね。いただきます」
A「ねえ、秋のレストランって名前にしたらいいんじゃない？」
C「それ、いいね！」
保「秋のレストランかぁ。素敵な名前だね。ほかの友だちもここに来るといいね」
A「看板があったらいいんじゃない？」
B「じゃあ、紙に描こう」片付けの時間が近付く。
保「ちょっと大きな紙を用意しておこうか？」
A「明日、看板を朝、つくろうね！」
- <次の日>
- 秋のレストランの看板をつくる。
A「先生、看板つくろう」
保「用意しておいたよ」
A「（あきのレストランと描く）
どんな絵を描いたらいいかな？」
保「秋はどんな食べ物があるかな？」
A「クリ！ほかにカキとか・・・」

秋のレストランです



保育者の援助

- 日頃、クラスの子どもたちが集めたクヌギの実で持ち帰らずに余ったものを、誰でも使えるようにテラスに置いておいた。
- ままごとハウスで自分たちで遊びを楽しむ姿を見守りながら、誘われたことをきっかけにお客として遊びに参加した。
- 身近な自然物を使って遊ぶことで、自然と季節を味わっていることを感じることができるよう言葉掛けをした。
「秋のごちそうがいっぱいおいしそうですね」
- ほかに子どもたちも遊びに気付くといいなと考え、看板の紙を大きめにすることを提案した。
- 前日に約束した紙と紙を留めるための画板を用意しておいた。
- レストランで料理をつくるB児、C児と看板をつくるA児とが役割分担をして遊びを進めようとする姿を大切に、A児がもっている看板のイメージを共有するようにした。

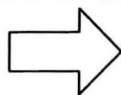
考察

子どもたちは園庭の木々が増える様子から季節の変化を感じ取り、遊びにこの時期ならではの自然（クヌギや落ち葉など）を取り入れて楽しむ姿が見られた事例である。必要な材料を友だちと一緒に集めたり、つくる人、材料を調達する人と役割分担をしたりして、子どもたちは遊んでいた。この姿から、子どもたちはこれまでの経験を生かして、どこに何があるのか、自分たちが遊びをさらに楽しむためには何が必要なのかを考えることができていることが分かる。

保育者として、子どもたちが自分たちで遊びを進めて楽しむ姿を見守りながら、さらに様々な友だちのかかわりが広がるような援助が必要だと考えた。そこで、看板づくりを一緒に行い、周りの友だちに知らせる手段を探ったり、この事例の後に、メガホンを使ってお客を呼ぶことを子どもたちと考えたりするなど、子どもたちの仲間となって一緒に遊びを楽しみながら遊びやかかわりが広がるような援助を行った。今後も子どもたちと共に季節を敏感に感じ取り、遊びの充実を図っていきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

自分たちで考えた遊びを楽しむ姿



さらに遊びを楽しもうと工夫する姿

自然への慈しみ

気付く

感動体験

伝え合い

充実感

対象児 年長児 (男A児)

記録日 平成21年10月15日(木)

場面 秋の実り

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

青空が広がり、秋らしいさわやかな日が続いている。子どもたちは、運動会で経験したことを遊びの中で再現したり、様々な友だちとかかわったりして、遊びを楽しんでいる。園庭では植えてある木々の葉やクヌギなどの木の実が落ち始めている。また、カキなどの果実や稲穂が色付いている。子どもたちは、草や木の実を集めて色水をつくったり、ままごとに使ったりなど、自然への興味を深めている。

子どもの姿

- A児が笑顔で保育者に話しかける。
A「ハッサクがあるのを見つけたんだ」
保「えっ！どこにあったの？」
A「教えてあげようか？」
- ハッサクの木のところへ行く。
A「(ハッサクを指差しながら) ほら、ここにあるんだよ」
保「わあ、大きな実だね。教えてくれてありがとう。
あっ、こっちにもある。いくつあるのかなあ？」
A保「1, 2・・・」
A「5個くらいあるよ」
保「もっと大きくなるのが楽しみだね」
- 2人で、田んぼに行き、稲を見る。
保「触ってみようか」
A「固いね。つぶつぶしてる」
B「何してるの？」
保「Aくんと一緒に稲を見ていたんだ」
- B児も稲を見たり、触ったりする。
保「この稲が・・・」 B「お米になる」
保「お米になったら・・・」 A「ご飯になる」
保「ご飯になったら・・・」 B「おにぎりになる」
保「楽しみだね」
AB「うん！」



保育者の援助

- A児がハッサクの実を見つけたという発見に保育者も一緒に喜び、共感する。
- 一緒にハッサクの実を見に行く。A児が指差したところを見て、驚きや喜びを言葉で表現し、この後の楽しみに繋げられるような言葉掛けとした。また、実と一緒に数えながら、数や数量に気付くようにした。
「わあ、大きな実だね。教えてくれてありがとう。あっ、こっちにもある。いくつあるのかなあ？」
「もっと大きくなるのが楽しみだね」
- A児の表情から稲を触りたいなという思いを感じ、触ってみようと言葉掛けをした。稲を見たり、触ったりすることで、A児の視覚や触覚で稲の様子を感じてほしいと考えた。
- 後からやってきたB児と一緒に稲を見て、この稲がこれからどのようにっていくのかを言葉で表し、A児とB児がこれまでの経験を通して考えていることを大事にしつつ、期待感が芽生えるように心掛けた。
- その後も園庭の木々の様子などを一緒に見ていった。

考察

秋の自然は、季節の移り変わりを肌で感じるには最適な季節である。木の葉が落ち始める、果実が色付き始めるなど、子どもたちの好奇心を刺激する。本事例は、園庭の身近な自然の変化に対し、子ども自身が気づきや発見をした事例である。日頃、室内遊びが多かったA児が運動会などを機に園庭に出掛ける機会が増え、その際ハッサクの実を見付け、気持ちが高まり、保育者に笑顔で伝える姿が見られた。また、近くにいたB児も一緒に見たり、話したりすることで、同じことを共有する友だちへと繋がっていくと思う。この後も、園庭のヒメリンゴやドングリを見たり、草花をつんだり身近な自然に期待をもって触れていった。保育者として、子どもたちの好奇心や探究心をかきたてるものを、いかにたくさん環境として用意できるか、興味・関心をもつ心を育てる援助ができるかを考えていきたいと思う。また、子どもが感動したことへ共感できる心を常にもつことが大切にしたいと思う。

本事例から見られたA児の自分らしさの広がり

ハッサクの実を見つけた
うれしさを感じる姿保育者や友だちと季節を感じ
ることができたうれしさや共
感できた喜びと充実感

～Ⅲ期の事例より～

クラス	年少	年中	年長
保育者の援助の在り方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一人一人の思いを満たせるように丁寧にかかわる。 ○ 子どもたちの気付きに共感する。 ○ 子どもたちの気付きや年長児の行動が子どもたちの刺激となるような言葉掛けをする。 ○ 諸感覚で感じることに（空の様々な色合いや雲の濃さや形など）を大切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分で経験して感じた喜びや気付きを、保育者だけでなく「クラスのみんなにも伝えたい」という子どもの気持ちを汲み取り、伝える場を設ける。 ○ 一人の気付きが周りへも広がるような機会をもつ。 ○ 諸感覚を駆使しながら自然と触れ合うことができるように、言葉掛けを工夫する。 ○ 子どもたちの思いを受け止め、心を揺り動かされるような様々な言葉掛けを探る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちが自分たちで遊びを進めて楽しむ姿を見守りながら、さらに様々な友だちとのかかわりが広がるような援助をする。 ○ 遊びの中で数や量に気付けるような言葉掛けをする。 ○ 子どもが諸感覚で自然を感じるができるように、意識して言葉掛けをする。
環境構成の工夫・改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちの身近にどのような草木があるかを把握しておく。 ○ 季節の草花の種をまいたり、育てたりし、子どもたちが季節感を味わえるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一人の発見が周りの子どもたちへも伝わるようにみんなが見ることのできる場所にクリを置く。 ○ セミの抜け殻が入った虫かごを保育室に置き、子どもたちがいつでも観察できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 周りの友だちにも遊びについて知らせるために看板をつくるための用具やメガホンを準備する。 ○ 子どもたちの好奇心や探究心をかきたてることのできるような環境を探る。

かかわった自然とそれを使った遊びの例

《自然》

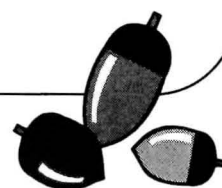
ヒガンバナ、クヌギ、ドングリ、オナモミ、芋、クリ、ムラサキシキブ、トンボ、セミの抜け殻、木陰の気持ちよさ、雲の形や空の色の面白さなど

《遊び》

ドングリ：砂や土、水と一緒に使って料理づくり、ドングリ駒、ドングリトトロ、ドングリマラカス、ドングリすべり台、ドングリキャンディー

オナモミ：衣服にくっつける、的当て

芋のつる：乾かしてクリスマスのリースをつくる





○ IV期 ～自然とのかかわり～

稲刈りは大変だけど、おにぎりパーティーのためにがんばろう！



おいしいお米とれるかな？
(2週間くらい干した米を下ろし、脱穀の準備)



ミカン (ハッサク)、
おいしいね。



ジュズダマ、なかなか通らないな・・・
(ジュズダマを使ったアクセサリー
づくり)



ヒヤシンスの根っこが少し
出てきてるよ。(水栽培の
ヒヤシンスを見て)



うみ組



プチプチってなるのが面白
いね。(フィルムケース
を使った脱穀)

飼育舎

タマネギさん、
大きくなってね。



大きなカブになあれ！



よいしょ！(保護者
と一緒にもちつき)



集めた落ち葉にゴロ～ン。
気持ちいいよ～！



〇〇君を葉っぱで埋めち
やうぞ～！



ギャー (でも楽しい)

イチョウの花束だよ。



きれいだなあ。
黄色い絨毯みたい。



先生、イチョウの雨
だよ～。(イチョウの
葉をまき上げて)



料理ができたら食べ
に来てね。(いろい
ろな落ち葉を使って)



葉っぱのお風呂だよ～。



ほし組



体がボカボカしてき
たよ。(長縄跳び)

はな組

場面 大きくなあれ

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

11月に入り、園庭の木々が紅葉し、色とりどりの葉や実などがたくさん落ちている。子どもたちは、落ち葉や木の実を集めて、ごっこ遊びやままごとななどの遊びの中に取り入れている。また、秋の風で舞う落ち葉を追い掛けたり、日なたと日陰の暖かさを感じたりしている。深まる秋の自然を全身で感じている子どもたちである。

子どもの姿

- A児とB児がたくさんのオナモミを集めている。
- 野草園に2人でオナモミを植える。
A「大きくなるといいね」
B「うん」
A「そうだ。トトロ(映画)しようか」
AB「うーん、ぱっ！」
しゃがんでジャンプをする動作を、何回も繰り返す。
保「何をしているの？」
A「ここにオナモミを植えたの」
保「そうなんだ。どうしてジャンプしていたの？」
A「大きくなってほしいから。トトロでしていたの」
B「そうなんだよ」
保「あっ、私も知っているよ。一緒にやってもいい？」
AB「うん」

保育者の援助

- オナモミは、秋の自然として親しめるよう、子どもたちの目の届くところに環境として植えておいたものである。
- 子どもたちが、お互いの気持ちを言葉で伝え合い、「大きくしたい」というイメージを動作で表す姿を見守った。



- 子どもたちの大きくなってほしいという思いに共感し、一緒に掛け声やジャンプなどの動作をした。同じイメージをもっていることのうれしさや同じ動作を一緒にする楽しさを共有した。

「あっ、私も知っているよ。一緒にやってもいい？」

考察

本事例は、子どもたちが秋の自然を満喫し、秋に経験した楽しみを次の季節につなごうとしている事例である。子どもたちは、オナモミをたくさん集めたり、友達や保育者にくっつけたりしながら楽しく遊んでいた。A児とB児は、その日々の生活の中で、とげのあるオナモミが種であることを知り、植えて大きくしようと考えたのだと思う。保育者も一緒に参加することで、2人の思いとつながることができたと思う。降園時には、3人で「楽しみだね」と会話をした。

保育者として、植物などの不思議さや変化、自然の移り変わりなどを子どもたちが様々なかたちで感じられるように、園内の環境を整えていきたい。

本事例から見られた年長児の自分らしさの広がり

友だちと種を植える姿



友だちや保育者と思いを含め、期待感を膨らませる姿

場面 お花イチョウ屋さん

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

秋が深まり、色付いたイチョウ、カエデ、サクラなどの葉が落ちて、園庭を彩るようになる。

子どもたちは、「イチョウの絨毯だね」「カエデの葉が赤くなったね」など感じたことを言葉に表して保育者に伝えてくる。これまでも季節による木々の変化を見てきた子どもたちは、どの木の葉が何色になるということを知っており、色付いた葉を使った遊びも経験してきている。

10月には、ドングリなどの木の実を使って「秋のレストラン」を開いていた年長児が、落ちているイチョウの葉を使ってキツネをつくり、年少児にプレゼントして喜んでもらったことをきっかけに、友だちとお店を開いた事例である。

子どもの姿

- お店屋さんの準備を始める。
A「今日は、イチョウのお店屋さんをするんだっ
たよね」
保「昨日のイチョウの葉っぱとかご、置いておいたよ。テーブルはどこに置こうかな」
A「Bちゃん、C君、行くよ～」
C「ここに椅子を持ってきたら（いいね）」
B「何屋さんって言ったらいい？」
A「お花紙の花も一緒だから・・・」
AB「いらっしやいませ～、お花イチョウ屋さん
がありますよ」
- 年中児、年長児のお客がやってくる。
B「一列に並んで。何がいい？」
中「お花、お花」
B「お花つくってるからね。これ、いる？」
中「いる！」
A「Bちゃんがイチョウのキツネつくって。先生
が（イチョウの）花をつくるから」
保「お待たせしました。お花どなたでしょう？は
いどうぞ」
B「（イチョウのキツネを見せながら）これサク
ランボみたいでしょう。キツネの反対にした
の。C君は花紙の店長だからね」
C（黙々とイチョウの葉を集める。）
- お客だった年中児がやってくる。
中「仲間に入れて」 C「いいよ」

保育者の援助

- 前日の遊びを翌日も続けたいという子ども
たちの思いを受け止め、前日に使ったイチョ
ウの葉、かご、テーブルなどをセットにして
保育室近くに置いておいた。
- 子ども同士でお店の準備を進める姿を見守
り、仲間になってイチョウの葉を集めたり、
子どもたちからもらったイチョウの葉で花束
をつくったりする作業を進めた。
- 自分たちでお客を呼び、お店屋さんを始め
た姿を見守り、お店の一員として注文された
ものをつくったり、子どもたちの仲間となっ
てお店屋さんになりきって子どもたちと会話
したりするようにした。

「お待たせしました。お花どなたでしょう？
はいどうぞ」

- 自分なりに工夫してイチョウの葉を使うB
児の姿を認め、イチョウの葉とかかわる楽し
さを感じられるような言葉掛けをした。

「Bちゃんの面白い。どうやってつくったの？」
「イチョウの葉っぱっていろんなことでき
るんだね。」



考察

秋の深まりを様々な自然物とかかわることを通して感じてほしいと考えていた時期、子どもたちが「イチョウの葉でキツネをつくる」という自分のできることを生かしてお店屋さんごっこを始めた事例である。子どもたちがイチョウの葉を使って遊ぶ姿を大切に、翌日につなげていけるように、子どもたちと一緒に遊びに使ったものを保育室近くに整えておいた。子どもたちはこれまでもお店屋さんごっこを経験してきていることから、自分たちで役割分担し、お客を積極的に呼び込む姿が見られた。そこで保育者は、子どもたちの仲間となってお店屋さんの一員となり、子どもたちと同じように決まった役割を楽しみながら遊びに参加するようにした。

子どもたちに味わってほしい自然の変化を保育者が明確にしておき、それを子どもたちの遊びの中で自然な形で生かしていけるように心掛けたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

自分のできることを生か
して楽しむ姿



友だちと役割分担して、自分たちで
遊びを切り盛りする姿

対象児 年少児

記録日 平成21年12月 3日(木)

場面 落ち葉の雨

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

12月になると肌寒く、秋の深まりの終わりを感ずる。本格的な冬に向かいながらも暖かい日があったり、冷たい風が木々を揺らす日があったりする季節の変わり目を感じながら、子どもたちは保育室や園庭で過ごしている。イチヨウやナンキンハゼ、クヌギなど落葉樹の葉を山のように集めたり、クッションにしたりして遊んでいる。

子どもの姿

- テラスからイチヨウの葉が散っている様子を見る。
A「葉っぱの雨が降ってる」
保「ほんとだね。葉っぱの雨だね」
B「風くんが(葉っぱを)落としてくれたよ」
保「風くんがたーくさん葉っぱを落としてくれたね」
- C児が一人で保育室から園庭を眺めている。
保「Cくん、落ち葉集めに行かない? いい物があるんだけど」
C「なに?」
保「熊手。葉っぱを集めるの」
C「やる」
C児の姿を見た数人の年少児が集まってくる。
D「貸して」
E「私もさせて」
保「いいですよ。この箱の中に入れて運ぼうか」
C「いいよ」
D「私も(箱を)持つ」
E「私も」

保育者の援助

- A児、B児そのほか数名の年少児と一緒にイチヨウの葉が風に散る様子を見上げながら、A児、B児の素直な感想や言葉を大切に受け取り繰り返した。また無言で見上げている子どもたちの気持ちも推し量りながら楽しんだ。
- 数日前から大きな取っ手のついた箱を準備してあったので、子どもたちは落ち葉集めを素手で楽しんでいた。そこでもっと楽しめるように小さなプラスチックの熊手を用意してあったので、一人になったC児を誘ってみた。C児がはりきって落ち葉を集めるのを見て、他の子どもたちも興味をもって集まってきた。友だちと楽しく落ち葉集めができるように手伝ったり、見守ったりした。

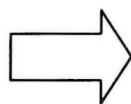
考察

子どもたちは晩秋の落ち葉をたくさん集めて山をつくったり、ソファや布団に見立てて触ったり、乗ったり中に入ったりして落ち葉の感触やにおい、種類の違い、色や大きさの違いなどを全身で感じ取っている。また、木の葉が紅葉し、枝からどんどん落ちてくる不思議さを雨に見立てて言葉にしたり、風を擬人化して感じたことを表現したりするのは、子どもたちの心が揺さぶられているからではないかと考える。そんなとき、保育者として今回はその感動に共感し、同意の言葉を繰り返したが、もっと言葉を引き出すような言葉掛けを工夫すればよかったのではないかとも思う。

プラスチックの熊手は小さなサイズのもので、年少児にも安全で使いやすい。落ち葉をたくさんかき集めることが容易にできることで、活動がスムーズになり仲間も増えてC児も楽しく活動できた。今回の熊手のように子どもの体にあった教材をもっと探していきたいと思う。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

秋の自然を楽しむ姿



いろいろな感覚を使い、自分の言葉や行動で秋の自然を感じる姿

対象児 年中児

記録日 平成21年12月3日(木)

場面 かくれんぼ

かかわりの対象

人

もの

自然

これまでの姿

運動会やおたのしみ会などの大きな行事を通して子ども同士のかかわりが深まり、広がってきている。友だちと一緒に役割を分担しながらごっこ遊びをしたり、秋の自然や初冬の自然に見られる落ち葉や木の実などをいろいろなものに見立てて遊んだりする姿が見られている。集団で遊ぶときのルールを、年中児なりに自分たちで決めようとしたり、守ろうとしたりするようになっているが、実際は難しく、保育者の援助がまだまだ必要である。

子どもの姿

- かくれんぼの仲間を集める。
A「先生、かくれんぼしたい!」/B「かくれんぼ!」
保「いいよ、でも3人だけだとさみしいな。他にする人がいないか聞いてみるね」
A「うん、そうだね」
保「Cくん、Dくん、Eくん、かくれんぼしない?」
C「やる!」/D「ぼくもやる」/E「鬼になろうか?」
保「かくれんぼジャンケンするよ、負けた人が鬼ね」
(みんなでジャンケンをする)
保「最初はCくんに鬼になってもらいましょう、鬼が数える場所はどこにする?」
C「木の所にする、1, 2, 3, ...も~いいか~い?」
- さらに人数が増えて、かくれんぼを再開する。
保「次はEくんが鬼だね。1~10を5回数えてね!」
E「1, 2, 3...も~いいか~い?」
E「も~いいか~い?」
(みんなが「もういいよ」というまで何度も聞く)
AB「Eくん、こっちにいるよ~」
E「まだ隠れていない人がいる!も~いいか~い?」
E「〇〇くん、見~付けた!」
保「あとはFくんだけだね、どこにいるのかなあ。みんなも一緒に探してみよう」
E「Fく~ん、もう片付けの時間だぞ~」
(Fくんを毟にかけようとしている姿)
G「先生、Fくんがいたよ」
保「わあ!Fくん、どこに隠れていたの?」

保育者の援助

- 「かくれんぼ」がしたいという思いを受け止め、大勢で遊ぶ楽しさを味わえるように、他の友だちも一緒に参加できるような言葉掛けの工夫をした。
「でも3人だけだとさみしいな。他にする人がいないか聞いてみるね」
- 子ども同士で役割を決めようとする気持ちが芽生えてきていることを受け止めながらも、大事なルールのポイントは共通理解できるようにした。
「負けた人が鬼ね」
「最初はCくんに鬼になってもらいましょう」
- 人数が増えると、ゲームの進行状況が全体に伝わりにくくなるので、状況を見て必要に応じた援助ができるように意識しながら見守った。
- 葉や枝が体に触れる感触や落ち葉を踏みしめたときの音、臭いなどを味わえるように、保育者も諸感覚を働かせながら楽しんだ。
- ルールを忠実に守ろうとする子どもの姿を大切にした。
- 鬼になって最後まで友だちを探すことができるように、先に見付かった友だちと一緒に様子を見守ったり、探すのを手伝ったりした。
「あとはFくんだけだね、どこにいるのかなあ。みんなも一緒に探してみよう」

考察

本事例は、たくさんの友だちと一緒に「かくれんぼ」を楽しむ中で、遊びに必要なルールが分かり、ルールを守りながら遊ぼうとした事例である。

保育者は、子どもたちの「かくれんぼ」がしたいという思いを受け止めながら、大勢で遊ぶ楽しさを味わってほしいと思い、他の友だちも一緒に参加できるような言葉掛けの工夫をした。最近子ども同士で遊びを展開していけるようになってきているが、大勢で遊ぶ際にルールを共通理解して遊ぶ経験は少なく、保育者の援助は必要不可欠である。

そこで、今回、保育者も一緒に遊びに加わりながら、様々な友だちとのかかわりが広がるように援助し、大事なところでのルール確認を心掛けたことで、遊びが途切れることなく続いたと思う。

今後は、子ども同士でルールの確認ができるようになったり、遊びを展開したりできるようになることを期待し、繰り返し遊ぶ姿を見守っていきたい。また、仲間集めも子どもが主になって取り組めるようになってほしい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

友だちと一緒にかくれんぼをして遊ぶ姿



遊びの中のルールを理解し、みんなルールを守りながら遊ぶ姿

場面	かくれんぼ	かかわりの対象	人	もの	自然
<p>これまでの姿</p> <p>子どもたちは「一緒に遊ぼう」と友だちを誘ったり、自分のしたいことを友だちに伝えようとしていたりするようになり、友だちとかかわって遊ぶ面白さを味わうようになってきている。時折、ぶつかり合うこともあるが、保育者に互いの気持ちを代弁してもらったり、言葉を補ってもらったりするなどして、自分の気持ちに折り合いをつける経験もしてきている。</p> <p>この時期の園庭は、ドングリはもちろん、イチヨウやナンキンハゼの葉も落ち、子どもたちは落ち葉集めや木の実集めをしたり、落ち葉の絨毯に寝転がったりしている。また、かくれんぼという遊びを知り、簡単なルールのある遊びも楽しめるようになってきた。</p>					
子どもの姿		保育者の援助			
<p>○ 保育者をかくれんぼに誘う。</p> <p>A「先生、か・く・れ・ん・ぼ！」</p> <p>保「Aくん、かくれんぼがなあに？」</p> <p>A「ぼくと一緒にかくれんぼしよう！」</p> <p>保「いいよ。ほかの友だちも誘ってみたら」</p> <p>B「かくれんぼ？私もする！」／C「ぼくも！」</p> <p>D「仲間に入れて！」</p> <p>○ 友だちを誘いに行く。</p> <p>A「かくれんぼしよう」</p> <p>E「いいよ！」</p> <p>F「しない！今、つくってるんだもん」</p> <p>保「Aくん、Fちゃんは今、お料理をつくってるところだから、また今度、誘ってみようよ」</p> <p>○ 鬼になるか、隠れるかを決め、ルールを確かめる。</p> <p>保「隠れる人だあれ？」／ABCD「は～い！」</p> <p>保「じゃあ、鬼になる人はだあれ？」</p> <p>E「は～い。先生と一緒に探す！」</p> <p>保「十数えて『もういいかい』って言うよ。隠れていたら、『もういいよ』って言ってね」</p> <p>GH「仲間に入れて！」／ABCDEF「いいよ！」</p> <p>保「ほし組さんも一緒だよ！面白くなりそうだね」</p> <p>○ かくれんぼをする。</p> <p>E保「・・・九、十。もういいかい？」</p> <p>ABCDFGH「まあだよ！」／「もういいよ！」</p> <p>E保「もういいかい？」／ABCDEF「もういいよ」</p> <p>保「みんな、どこに隠れたのかなあ」</p> <p>E「どこに隠れたのかなあ」</p> <p>保「Bちゃん、見～付けた！Cくん、見～付けた！」</p> <p>E「見付けた～！今度は、逃げる！」</p> <p>保「いいよ！でも、まだAくんが見付からないの。どこに隠れたのかなあ」</p> <p>○ みんなでA児を探す。</p> <p>保「いないねえ。・・・あ～いた～！」</p> <p>A「ずっとここにいたんだよ。アラカシの後ろ」</p> <p>保「ここからみんなが探しているの見ていたの？」</p> <p>A「そうだよ。先生、こっち来て！ねっ、ここから見えるでしょ」</p> <p>保「うわあ！アラカシって、いい隠れ場所だね。みんな、Aくんに拍手～」</p> <p>BC「ほんとだ、見える！Aくん、すごい！」</p>		<p>○ 「かくれんぼをしたい」気持ちを受け止め、友だちと遊ぶ面白さも味わってほしいという意図から、ほかの友だちも誘ってみることを提案した。</p> <p>「ほかの友だちも誘ってみたら？」</p> <p>○ 遊びに誘ったり、誘われたりする様子を見守りながら、必要に応じて言葉を補うようにした。</p> <p>「Fちゃんは今、お料理をつくってるところだから、また今度、誘ってみようよ」</p> <p>○ 誰が鬼で、誰が隠れるかをはっきりさせるとともに、遊びのルールを確かめるようにした。</p> <p>「隠れる(鬼になる)人はだれ？」「十数えて『もういいかい』って言うよ。隠れていたら、『もういいよ』って言ってね」</p> <p>○ 遊びの面白さを十分味わえるよう、保育者が遊びの展開をリードするようにした。また、名前を呼んで遊びを進めることで「自分も仲間の一人」という喜びも味わえるようにした。</p> <p>「・・・九、十。もういいかい」</p> <p>「みんな、どこに隠れたのかなあ」「○○ちゃん(くん)、見付けた！」</p> <p>○ 上手に隠れることができたA児の喜びを受け止め、みんなで賞賛するとともに、アラカシがよい隠れ場所にもなることに気付けるようにした。</p>			
<p>考察</p> <p>本事例は、保育者や友だちと一緒にかくれんぼを楽しむことを通して、一層、体を動かして遊ぶ面白さや簡単なルールのある遊びの面白さを味わっていた事例である。</p> <p>保育者は、遊びの面白さが十分味わえるように遊びの展開をリードしたり、「自分も仲間の一人」という喜びが味わえるように名前を呼んだりして遊びを進めた。A児は日頃から、アラカシを拾い、遊びに使っていた。だからこそ、今回の隠れ場所に選んだのだろう。</p> <p>今後も、異年齢児とも自然に触れ合える環境づくり、関係づくりを大事にしていきたい。また、様々な園庭の木々に触れ合う機会も大事にしていきたい。</p>					
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <p>かくれんぼを楽しむ姿</p> <p>→</p> <p>新たな隠れ場所を知り、かくれんぼの面白さを繰り返し味わう姿</p>					

対象児 年中児（女A児）

記録日 平成21年12月初旬

場面 ラーメンづくり

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

子どもたちは、自分のしたい遊びを見付け、様々な遊びを日々楽しんでいる。保育室では、マクドナルド屋さんごっこをする子どもたちが、年少組の子どもたちを招待する姿も見られる。イチョウやカエデが色付いた園庭では、氷鬼やかくれんぼをして遊ぶ子どもやままごとなどに落ち葉や、木の実を使って遊ぶ子どもも見られる。

子どもの姿

- シートを引いたA・B児が保育者を呼ぶ。
A「先生、先生、こっちに来て。ピクニックしているの」
B「ラーメンをつくっているの」
保「今日は、天気も良くてピクニック日和ですね。おいしそうなラーメンもあるね」
A「先生、Cちゃんと麺の葉っぱを拾ってきてください。私はラーメンを混ぜておきます」
保「はい、分かりました」
- 拾った葉っぱをA児に渡す。
A「ありがとう。じゃあ、先生、ラーメンづくりのお手伝いをお願いします」
B「おいしいラーメンをつくってください」
(保育者がカエデの葉っぱをラーメンに入れようとすると)
A「先生、赤の葉っぱは入れちゃだめだよ。麺は黄色の葉っぱ（クヌギの葉）でしょう。赤の葉っぱは最後にチャーシューで入れるんだから」
保「そっか。赤色のカエデは最後にチャーシューで入れるんだ。じゃあ、黄色のこの葉っぱは麺にしてもいいかな？こっちの茶色の葉っぱはどうしますか」

保育者の援助

- 子どもたちのままごとが盛り上がるような言葉を掛けた。

「今日は、天気も良くてピクニック日和ですね。おいしそうなラーメンもあるね」



- 子どものおいしいラーメンをつくりたいという思いを受け止め、一緒にラーメンづくりを楽しんだ。
- 葉っぱの色の違いを意識したり、子どもの思いが膨らんだりすることができるような言葉掛けを行った。

「そっか。赤色のカエデは最後にチャーシューで入れるんだ。じゃあ、黄色のこの葉っぱは麺にしてもいいかな？こっちの茶色の葉っぱはどうしますか」

考察

本事例は、A児が園庭の木々の葉っぱをふんだんに使い、ラーメンを友だちや保育者とつくり上げていく場面である。

A児は、年少児では生活経験が浅く、自分の気持ちを表現することができずに、一人で遊ぶことが多かった子どもである。年中児以降では、友だちとのかかわりも増え、自分のしたい遊びを気の合う友だちと一緒に楽しむ姿が見られるようになってきている。本事例では、A児が率先して役割を分担したり、葉っぱを自分のイメージと合わせながら自分たちのこだわりをもって遊んだりする姿が見られ、A児の成長を感じることができた。今回、保育者はA児の「葉っぱを使ってラーメンをつくりたい」という思いを十分に受け止め、遊びが盛り上がるように、一緒にラーメンづくりを楽しみながら、与えられた役割を果たしたり、遊びの様子を見守ったりする姿勢をとった。

今後も、子どもたちの成長を見守りながら、一人ひとりの「～したい」という思いを受け止め、子どものイメージを広げたり、表現したりすることができるような保育を展開していきたい。

本事例から見られたA児の自分らしさの広がり

友だちとしたい遊び
を楽しむ姿



友だちと同じイメージを
もって遊ぶ姿

～Ⅳ期の事例より～

クラス	年 少	年 中	年 長
保育者の援助の在り方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども同士のやりとりを見守りながら、必要に応じて言葉を補う。 ○ 遊びのルールを確かめるような言葉掛けをする。 ○ 遊びの面白さが十分味わえるように保育者が遊びの展開をリードする。 ○ 子どもたちの素直な感想や言葉を受け止め、繰り返す。 ○ 無言の子どもたちの表情を推し量る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 戸外で楽しくかくれんぼをする子どもたちに加わって一緒に秋の自然の深まりを感じながら遊ぶ。 ○ 遊びのルールのポイントを共通理解できるように言葉掛けをする。 ○ 一緒に遊びながら状況を見ながら必要に応じて援助する。 ○ 大勢で遊ぶ楽しさが味わえるように他の友だちも参加できるような言葉掛けをする。 ○ 子どもたちの遊びが盛り上がるような言葉掛けをする。 ○ 様々な葉の色を意識できるような言葉掛けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちの仲間となって遊びを楽しむ。(役になりきって会話もする) ○ 自分なりに工夫する姿を認めたり、自然(イチョウの葉)とかかわる楽しさを感じられるような言葉掛けをしたりする。 ○ 子どもたちに味わってほしい自然の変化を明確にしておき、子どもたちの遊びの中で自然な形で生かしていけるように心掛ける。 ○ 子どもたちの思いに共感し、イメージを共有する。
環境構成の工夫・改善	<ul style="list-style-type: none"> ○ かくれんぼを楽しめるような木がある場所を把握しておく。 ○ 落ち葉を集めるための大きな箱と小さな熊手を用意しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちがごっこ遊びを楽しむ道具(シートや砂場道具など)を用意しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前日の遊びが翌日につながるように使ったものを保育室近くに置いておく。 ○ 子どもたちの目に付くところに秋の自然物(オナモミ)を置いておく。

かかわった自然とそれを使った遊びの例

《自然》

イチョウ、カエデ、クヌギ、米、野菜の苗、種、ヒヤシンス・チューリップの球根、紅葉した葉っぱ、冷たい風、吐く息の白さ、肌寒い中で体を動かす心地よさなど

《遊び》

集めた落ち葉：たき火ごっこ、葉っぱのお風呂

様々な色の落ち葉：組み合わせせて形をつくったり、絵を描いたりする

葉っぱにかくれる(かくれんぼ)

